

納谷昌之著 「梅干しとひかり」 書評

一東京大学名誉教授 大津元一（一般社団法人 ドレスト光子研究起点）

70 編に達しようという多くの話題からなるこのユニークな書物を読みつつ、「このような本を書く人はどんな才能、感性を持っているのだろう」と驚愕しています。まえがきには「この本は教本ではない」とありますが、いやはやどうして、これはまさに光に関する優れた教本ですよ。

ところで技術開発に従事する人が新しい技術ネタを探す際、欧米先進国で流行している技術を「習う」ことからネタを「作る」ことへと意識を切り替える必要がありますが、「作る」ためにはある種の感性が必要です。本書はまさにこの感性が身につく教本でしょう。ついに光の書籍の新ジャンルが開拓されましたね。

光にまつわるエッセイはこれまでいくつか目にしましたが、本書はそれらとは大きく異なります。優れた独創技術を実用化した技術者として産業界で高く評価されている著者の筆によるもので、光に関する深い造詣にもとづく話題が満載です。各話題の前半では国内外の文学、自然現象、旅行、そして新技術などと光とのつながりが紹介されており、著者の視点の広さが光ります。まさに「どんな才能？感性？」と驚きつつ楽しく読み進められます。

しかし後半になるとこれらを科学的に鋭く（かつ奥ゆかしく）分析することへ進むので、「しっかり習わなければ」と少し緊張します。そして全部読み終わると何かを「作る」勇気が湧き、一服の清涼剤を味わった気分になるのです。いや、まさに「梅干し」を一口かじった気分かな。

本書はどこから読み始めても良いですが、一旦読み始めると止まらなくなります。題名の「梅干しとひかり」も秀逸で、その由来も本書に記されています。「日本人として生まれてよかった」と実感します。光の多くの現象を扱ってい

るのに図や写真が一枚もありませんが、これもまた良いのです。文章を読むと自ずから画像が浮かび上がってきますので。(そうそう、唯一、表紙カバーに「梅干しとひかり」のきれいな写真がありますね)。書評執筆者としての私は「ラーメン」、「ステンドグラスは・・・」、「やっぱり百聞は・・・」など、いくつかの話題の現場に立ち会った記憶があり、読みながら思わず「ニンマリ」しました。

幅広い世代の方々に本書をお勧めします。学生諸君、本書は将来の勉強や仕事の方向を探る栄養、活力となりますよ。さわやかな「梅干し」をご賞味あれ。